

技術者は技術者冥利を語ろう



随 筆

田 中 一 朗*

Technologists had better speak about their achievements and joy.

Key Words : Joy of technologists, Achievements in technology, Speech in public

1. 序

近年の技術の進展には目を見張るものがあり、社会に及ぼす効用、影響も大変顕著になってきた。正に技術なくしては夜も明けぬ時代である。それと共に技術なるものの価値、重要性が広く一般に認識され、技術立国の概念も浸透してきたことは誠に結構なことで、技術者の喜びと誇りは更に増していくことであろう。昨今危機的意識が高まって来たものに環境問題、地球温暖化問題があるが、これらの解決も実は技術次第と考えられるので、技術の重要性は今世紀更に高まるものと考えられる。

しかし我国の国内問題に目を転じると、技術あるいは科学技術の分野で気掛かりなことが出てきている。その一つは人口減少に伴う技術者供給不足問題であり、もう一つは、それに拍車をかける若者の理工系離れ問題である。資源のない日本にとっては技術が命の綱であり、このような問題には早急に手を打たなければならないであろう。筆者は現役の頃は工学部で学生に講義を行って来たので、この問題は憂慮にたえない。勿論これらには多くの理由があり、次々対策が講じられ、又講じられようとしているが、まだ多くの努力と時間が必要であろう。本文はこれらの問題を直接論じようとするものではないが、その一環として筆者が時折考えている技術者冥利とい

う事柄につき、その一歩踏み込んだ形として技術者冥利を語るといふ題目の下に拙見を述べさせていたきたい。

2. 技術者冥利

技術者であれば誰もが何度かは技術者冥利を味わった経験があるに違いない。筆者の専門分野は造船学であるが、この分野でいえば例えば船の進水式、これなどは関係者にとっては厳粛かつ緊張の一瞬であり、船が浸水台を滑り下り首尾よく海面に浮んだ後は、一転して今度は最高の達成感が得られる行事であろう。筆者は造船所勤務の経験がないが、進水式の見学に行く度にぞくぞくするような感動を感じて来た。これこそが技術者冥利であろう。勿論技術の分野には何万部品から成る巨大システムからミクロンオーダーの製品、ナノテク技術など到底一言では表現しえない範囲と種類がある。したがって各分野、各技術的成果で経験される技術者冥利もそれぞれ異なり、すべてを同列で論じることはおそらく適当ではなかろう。しかしそれにもかかわらず、それぞれの分野で技術者冥利に浸る瞬間が存在するに違いない。

さてここで冥利の特性というものを考えてみよう。上記のように技術分野は千差万別であるが、それらに共通の、いわば普遍的な特性として冥利の個性がある。この語は筆者が勝手に作ったものであるが、その意味は、冥利というのはその事象に関わった者のみが抱く心象状態であり、関わっていない者は冥利を抱くことができないということである。又このことは同じ事象に関わった複数の人達でも個人差のため冥利の内容、強さが変りうることも意味することになるが、ここではあまり細かく考えず、技術者個人のものであるという位に留めておく。

次に別の特性も考えられ、相対性と称しておくこ



* Ichiro TANAKA

1931年9月生
大阪大学工学部造船学科卒業(1953年)
大阪大学大学院工学研究科造船学専攻博士課程退学(1959年) 助手、助教授、教授、附属図書館長、名誉教授(1995年) 現在に至る。
工学博士 造船学(船舶流体力学)
TEL : 078-593-5792
FAX : 078-593-6037

とにする。これには時間的相対性と空間的相対性と考えられそうであるが、今は後者のみを考えることにする。この意味は、冥利の発生源が多数存在する時、印象の強い冥利と、弱い冥利ができ、強い方が残る傾向があるということである。これもおそらく普遍性があり、多くの分野で想像されることではないかと考えられる。技術分野では、例えば交通機関のような巨大システムが一つの具体例であるが、この場合、ある要素の技術的重要性と価値が大であっても、また場合によるとそれが全システムの死命を制する場合であっても、別の観点、例えば経済性や利便性などマクロな観点からの判断で強弱が決められる場合がある、ということである。

最後にもう一つ特性3として技術的高度性をあげておく。これは言わずもがなという内容であるが、冥利が感じられた技術問題は技術的に極めて高度な、あるいは大変困難な問題の成功例であろうということである。勿論これも技術の分野とか規模は問わない。また、技術分野であるか他分野であるかにかかわらず、それが他に応用されれば極めて有用な成果をもたらすものと考えられる。

3. 技術者が技術者冥利を語ること

前章で技術者冥利の特性について考えた。本章では次の命題として、冥利で表される感激と技術を、その技術者個人の宝とするだけでなく、他の技術者あるいは広く社会の技術の進歩並びに当面特に技術人口の拡大のために役立つようにすることができないかということを考える。本章の見出しはその具体策を書いたもので、事は簡単、冥利に浸った技術者自身が、他の人達、特に技術者、後輩、若者、学生にその冥利を直接語るというものである。

そもそも2章で述べた特性1、個性からすれば、冥利を得た技術者がそれを人に語るということ自体少々矛盾があるという素朴な見方もある。これは確かにそうで、人から請われればいざ知らず、普通は能動的にこういうことがなされるとは考えにくい。しかし特性3として書いた通り、この場合の技術は極めて高度なレベルであるとか、大変な努力の末の成功であるなど価値が極めて高い筈である。従って冥利という喜びと、その因となる技術とが当事者自身の口から語られれば、聞き手が受ける心理的並びに技術的利益は大変大きいと考えられる。換言すれ

ば技術者が技術者冥利を語ることで、そうでなければ個人の手に留まっていた価値が、技術社会への大きな貢献となって伝達されることになるのではなかろうか。

特に、具体的状況として冒頭記したような昨今の技術人口減少の兆しを考えると、この対策の有力なものは当然、若者、学生に期待することになるが、技術への誘いを技術で行うという単純なことでは中々うまくいかないと考えられる。このような、若い人達にとってはいわば未知の世界への出発という問題の決定には意志、心に関わるため、そこに訴えかける方式が必要である。今は、冥利というかけがえのない体験があるのであるから、それを話すことが聞き手の心に共感を呼び起こす最良の方法と言えるのではなかろうか。この場合技術の話は冥利の根拠として必要であるが、その内容は冥利第一、技術第二の程度で十分である。当事者たる技術者が話すという点は何より重要であるということである。

なお前章では冥利の特性としてもう一つ特性2(相対性)を考えた。これは多数の冥利点が同一システム中に存在する場合であるが、本章で述べている事に関しては相対性は関係のない話とするのが妥当である。どの冥利点であろうが冥利とその由来である技術を語るという目的からいえばすべて同格であり、それぞれについて実行されることが望ましい。換言すれば、システム中の多数の要素技術については相互比較せず、それぞれについて語るということである。つまり相対性を独立性と言いかえても良からうということである。むしろこれにより相対性の副作用として出て来る全システム像の正しい理解の欠如という面が修正され、システム全体における各要素技術の役割と重要性が明確になるとも考えられる。

いずれにせよ、技術においても、又他のどのような分野でも、どのような問題でも、未知領域に足を踏み出すためには技術面そのもの、あるいは当該問題の事実面が不十分ないし未知のまま実行を決定しなければならない時が通常であろう。その際何が事柄を決めるかといえば、それは意志というか、心というか、技術とは無関係の人間の要素であるに違いない。本文は技術問題における例として技術者冥利なる言葉で表される事柄を述べたもので、技術そのものという純技術的側面と冥利という人間心象的側面の両面が等しく重要であることを指摘することを

試みたものである。

4．結言

技術が社会の隅々まで行き渡り技術大国と呼ぶにふさわしい社会が実現されるのが我々の希望である。そのためには技術自体の更なる進歩が必要不可欠であるが、技術を生むのも扱うのも実は人間である。

技術そのものと人間は常に一体であり、切り離す訳にはいかない。本文ではこの趣旨のもとに、一つの具体例として、冥利を通じて技術を語ることの意義を述べた。通常は寡黙かも知れない技術者が自らの冥利と技術を外部に語ることにより、技術と技術社会の一層の発展のため大いに貢献されることを期待したい。

